

地域医療における薬剤師の専門的な職務を同定する研究の総括

—三年間の抜粋版—

研究代表者 今井博久 国立保健医療科学院 統括研究官

研究要旨: 超高齢社会が進展する中、高齢者の医療需要は増加し、その多くが慢性疾患で薬物療法が中心になっている。こうした医療環境の急速な変化に直面して、地域の薬剤師が従来からの固定した役割から脱却し、「適切な処方設計（再提案）」あるいは「適切な薬物療法の管理」といった専門的な職能を発揮しなければならない。地域において薬局薬剤師や病院薬剤師が地域医療で運営されるチーム医療（医師・看護師など他の医療従事者とのかかわり）において連携強化（特に患者情報の共有化）を実行すること、在宅医療で患者情報を共有して適切な薬物療法が実施されること、薬剤師がより一層処方設計で中心的な役割を果たすこと等が実現できる地域医療システムの構築が期待されている。しかしながら、現状では、薬剤師の専門性や職能を有効に活用できる医療システムになっておらず、効果的で効率的な地域医療の実現には、薬剤師の専門的な能力を有効活用できる医療システムが必要である。本研究班は、「地域医療における薬剤師の積極的な関与の方策に関する研究」という研究タイトルであるが、最終的な目的は研究タイトルをより発展させて「地域医療における薬剤師の本質的な機能の同定およびそれを証明する科学的な根拠の構築」と位置付けている。これまで多くの研究者が行ってきた抽象的な医療システムの講話や理論的な職能を描くことではなく、定量的なデータを使用した実証研究によるエビデンス（科学的な根拠）を得ることにあり、薬剤師の職能を有効に活用できる医療システムの具体的な方策の提示にある。

わが国は先進諸国の中で最も早く超高齢社会を迎えているため、超高齢社会の地域医療システムを他の国に学ぶことはできず、独自に超高齢社会における地域医療システムを構築して行かなければならない。地域医療システムにおいて薬剤師は必要不可欠のヒューマン・リソースのひとつであり、その専門的な職務を行使して効果的で効率的な地域医療の展開を担う職種であり、わが国の医療環境の中で今後は最も有効活用されなければならない職種でもある。本研究班では3年間の研究期間で「地域医療における薬剤師の本質的な機能の同定およびそれを証明する科学的な根拠の構築」を図り、わが国の医療事情の適した薬剤師の専門的な役割を明らかにし、それを支えるエビデンスを構築してきた。

